

士大夫にとつての科擧――唐代の散文に見える意識――

岡本洋之介

はじめに

岑参は科擧及第を「戦勝」と詩にうたう。これはそれまでになかったことである。従来の「戦勝」とは、戦闘の勝利や胸中の葛藤が望ましい方向で落ち着くことを指す言葉であった。ところが岑参は科擧及第という名譽獲得を戦場でのそれになぞらえ、新たな意味を加える形で「戦勝」と表現した。以後、この表現は士大夫間に浸透し、及第落第をうたう詩にしばしば見えるようになった。「戦勝」というこの言葉は、唐代士大夫の科擧に對する意識の變化が表面化した一例と言えるものである。筆者は前論^①において以上の點を指摘した。

それを踏まえ、本論では科擧に起因して書かれた散文を考察の對象とする。進士科における試験内容と評價基準とは、時代が下がるにつれ變化していく。それに伴い士大夫の科擧に對する意識はどのように動いたのか。そこを明らかにしておきたい。

1

唐代の科擧は武徳三年（六二〇）に始まる。國子監所管の官學にて所定の期間學び、修了を認められると科擧に應試する資格を得られた。また、州縣が行う郷試に合格した者にもその資格が與えられた。これがいわゆる生徒と郷貢である。この生徒と郷貢

とが吏部試、開元二十五年（七三七）以降は禮部試に臨んだ。設置された各科のうち、地方長官の推薦を受けねばならない秀才科は早くに廢れ、明經科と進士科とが主流を占めた。

科擧が始まって以後しばらくは、進士科では時務策を五題出すのみの試験であつた。貞觀八年（六三四）に「試讀經史一部」が追加されているものの、具體的な内容はわからない^②。いずれにせよ主を占めたのは「對策」つまり散文である。では、及第を判定する基準はどこにあつたのか。その點について當時の士大夫が有していた共通認識を物語る逸話がある。王師旦が知貢擧を務めた際のものである。

貞觀二十年、王師旦爲員外郎。冀州進士張昌齡、王公瑾、並文詞俊楚、聲振京邑。師旦考其文策爲下等。舉朝不知所以。及奏等第、太宗怪無昌齡等名、問師旦。（『封氏聞見記』卷三・貢擧）

貞觀二十年（六四六）、文才ありと都まで名が聞こえていた張昌齡と王公瑾とが科擧に臨んだ。「冀州進士」つまり冀州での郷試を突破した郷貢として進士科に應じたのである。しかし王師旦は兩名を落第とした。その理由は誰にもわからず、太宗も兩名が不合格と知りいぶかしんだ。すると王師旦は答えた。

師旦曰、此輩誠有詞華。然其體輕薄、文章浮豔、必不成令器。臣擢之、恐後生倣效、有變陛下風俗。

兩名は確かに言葉は華やかなものの中身は輕薄で浮わつており、將來まっとうな者にはならない、もし及第させると他の士大夫が文辭華麗をよしとして模倣し世の風が華美に流れてしまう、それを案じるためである、と。衆目は張王兩名の文才を評價

し及第間違いなしと見ていた。しかし王師且はその點を評價せず落第とした。そのため誰も落第理由に思い到らなかつたのである。ということは、文才の有無や文章の華麗さに及第落第の基準があるという意識を、士大夫はみな持っていたことになる。

また、上元元年（六七四）には劉嶢が科擧について上疏している^③。なお、この時期、科擧を司るのは「禮部」ではなく「吏部」である。以下に示す資料が「禮部」とする理由はわからない。ここでは「科擧を司つた部局」を指すと考えておく。

國家以禮部爲考秀之門、考文章於甲乙。故天下響應、驅馳於才藝、不務於德行。

（『通典』卷十七・選舉五）

「國家、禮部を以て考秀の門と爲し、文章を甲乙に於いて考す。故に天下響應し、才藝に驅馳し、德行に務めず」國が科擧を扱う部局を人材確保機關とし文章の出來具合で上下を判定する、そのため士大夫は才藝に走り德行に務めなくなつたと劉嶢は述べる。才藝に傾斜すればそれだけ經學から離れてしまふ。劉嶢にとってそれは憂慮すべき事態であつた。そして、

今捨其本而循其末。況古之作文、必諧風雅、今之末學、不近典謨。勞心於卉木之間、極筆於煙雲之際、以此成俗、斯大謬也。

「今、其の本を捨て其の末に循う。況んや古の文を作すは、必ず風雅に諧^{かな}い、今の末學は、典謨に近からず」昨今の士大夫が根本を捨てて順序としては本來最後であるはずの物事になびき、昔は文章を書くとなれば必ず風雅になつていたのに當節は士大夫が手本とすべき經書とはかけ離れたものになっている。つまり、德行や經學がおろそかになっている現状、劉嶢はそこを問題視していたのである。また「心を卉木の

間に勞し、筆を煙雲の際に極め、此れを以て俗を成すは、斯れ大いに謬りなり」と述べ、技巧に走る詩文が定着することを誤りと斷じてもいる。そう主張せねばならぬほど、士大夫は詩文創作に注力していたのである。劉嶢の批判は、文章の出來具合で評價する科擧の取士基準の存在を裏付けるものと言えよう。

これら初唐期の科擧における文才重視の傾向は、試験内容の變更によつてさらに深化する。

調露二年（六八〇）、劉思立が科擧の試験科目變更を建議し^④、開耀元年（六八一）より進士科に雜文二首を作成する試験が追加された。そしてこの雜文試が實質上の詩賦試へと變化していく。

詩賦作成が出題されたのは、光宅二年（六八五）の「高松賦」が最も早い例と思われる^⑤。以後、時代が下がるにつれ賦や詩の作成を求めることが増加していく。判明している詩賦の題目を大曆までに區切つて以下に列擧しよう^⑥。

光宅二年（六八五）	高松賦
先天二年（七一三）	出師賦 長安早春詩
開元二年（七一四）	旗賦
開元四年（七一六）	丹甌賦
開元五年（七一七）	止水賦
開元七年（七一九）	北斗城賦
開元十二年（七二四）	終南山望餘雪詩

開元十三年（七二五）	花萼樓賦
開元十五年（七二七）	灞橋賦
開元十八年（七三〇）	冰壺賦
開元十九年（七三一）	仲冬時令賦 洛出書詩
開元二十二年（七三四）	梓材賦 武庫詩
開元二十六年（七三八）	明堂火珠詩
開元二十七年（七三九）	萸萸賦 美玉詩
天寶六載（七四七）	罔兩賦
天寶十載（七五一）	豹舄賦 湘靈鼓瑟詩
天寶十五載（七五六）	東郊迎春詩
上元二年（七六一）	迎春東郊詩
寶應二年（七六三）	日中有王字賦
大曆二年（七六七）	射隼高墉賦 長至日上公獻壽詩
大曆六年（七七一）	初日照露盤賦 寒夜聞霜鐘詩
大曆八年（七七三）	登春臺賦 禁中春松詩
大曆九年（七七四）	元日望含元殿御扇開合詩（上都試） 清明日賜百僚新火詩 （東都試）
大曆十年（七七五）	五色土賦（上都試） 日觀賦 龜負圖詩（東都試）
大曆十二年（七七七）	通天臺賦 小苑春望宮池柳色詩
大曆十四年（七七九）	寅賓出日賦 花發上林苑詩

光宅二年（六八五）の「高松賦」以降、先天二年（七一三）の「出師賦」「長安早春詩」出題まで、詩賦の作成が課されていたかどうかはわからない。しかし、開元から天寶にかけて増加し、大曆に入った頃には常態化していたことは明らかであろう。中唐前期に書かれた『封氏聞見記』は、進士科について「又、舊例に、雜文を試みるは、一詩一賦、或いは兼ねて頌論を試みる」^⑦と述べている。詩賦を一首ずつもしくは詩賦どちらか一首と頌か論を一首作らせる試験内容が中唐前期の時点で「舊例」であるなら、定着は當然それ以前ということになる。

また、同書は「進士の文名高くして帖に落ちし者、時に或いは詩を試み放過せしむ、これを贖帖と謂う」^⑧という特例の存在も伝える。進士科には雜文試と同時に、『禮記』もしくは『左傳』の大經と『論語』に關する帖經が加えられている。わざと答えにくい内容を出題するため、白髪頭になっても及第しない者がいたほどであった。よって進士科應試者は帖經を災厄とみなしていた^⑨。しかもこの時期の進士科は先に行われる帖經を通過できてはじめて雜文試を受けるという二段階選抜制になっていた。そこで、文才ありと名高い者に限って、帖經に落ちたことを詩でもって贖わせ救済したのである。

このように、詩賦作成、ことに詩作を重要視する傾向が色濃くなる中、寶應二年（七六三）、禮部侍郎の楊綰が科擧について上疏している。文中、楊綰は雜文試導入以後の士大夫の有り様を以下のように述べている。

幼能就學、皆誦當代之詩、長而博文、不越諸家之集。遞相黨與、用致虛聲、六經

則未嘗開卷、三史則皆同挂壁。況復徵以孔門之道、責其君子之儒者哉。（『冊府元龜』卷六四〇・貢舉部二・條制第二）

「幼くして能く學に就くも、皆當代の詩を誦し、長じて文を博うするも、諸家の集を越えず。遞いに相い黨與し、用て虚聲を致し、六經は則ち未だ嘗て卷を開かず、三史は則ち皆同に壁に挂く。況んや復た徵するに孔門の道を以てし、其の君子の儒を責むる者をや」幼少から當今の詩を憶え、文學といっても諸々の別集がせいぜい、なじみ同士で仲間褒めし、經書も史書もうっちゃったまま、ましてや儒學の道で役人を召し出すというのに君子の儒を求める者なんていやしない、と。楊綰の言わんとする事柄は前述した劉嶢の批判と同じである。雜文試導入以來、詩賦を重んじる風潮は士大夫間に根を下ろし、もはや抜き難いものとなっていた。そして進士科は中唐に入ってもなお文才の有無を取士基準としていたのである。

大暦年間には、科擧の不備缺陷を指摘し詳細な改革案まで盛り込んだ「擧選議」を趙匡が著している。その冒頭、趙匡は進士科での詩賦による取士を批判している。

夫才智因習就、固然之理。進士者時共貴之、主司褒貶、實在詩賦。務求巧麗、以此爲賢、不唯無益於用、實亦妨其正習、不唯撓其淳和、實又長其佻思。（『通典』卷十七・選舉五）

「夫れ才智の習就に因るは、固然の理なり。進士は時に共に之を貴ぶも、主司の褒貶、實に詩賦に在り」才能や聰明さが習いたがうことにもとづくのは元來當然の道理だ、進士というものを今の人は皆大切にするが、科擧を司る者の褒貶は詩賦にある、と。このくだりに續けて、「巧麗を求むるに務め、此を以て賢と爲す」詩賦の巧みさ

華麗さを求めることに注力しそれでもって才能有りとみなすのは、「唯だ用に於いて益無きのみならず、實に亦た其の正習を妨ぐるのみ、唯だ其の淳和を撓むるのみならず、實に又た其の佻思を長ぜしむるのみ」役立たない上に本來修めるべきことを妨げ、素朴穩健さをゆがめて輕薄な考えを育てるばかりだ、と警告している。この趙匡の指摘は注意しておいてよい。知貢擧による評價の材料が詩賦であり、しかも批判せねばならぬほど重要視している進士科の狀況を傳えているからである。

楊綰と趙匡の主張には、雜文試が弊害をもたらししていると説く共通點がある。科擧が士大夫のあるべき姿をゆがめ、經學の素養を顧みず德行無視を招くとみなしていたのである。しかし、士大夫が及第のため詩賦作成能力を重視する傾向に齒止めがかかることはなかった。

本章では、進士科の文才重視の傾向が唐初からあること、雜文試が設置され實質上の詩賦試へ變化していくこと、その結果、詩賦作成能力が重視されるようになったこと、以上の三點を確認した。次章以降、制度面におけるこれらの變化が士大夫の意識にどのような影響を及ぼしたのか、應試する側の散文から見えていこう。

2

科擧は唐初より存在するにもかかわらず、士大夫は何故か科擧に關連する事柄を詩の題材としていない。陳子昂が自身の落第をうたった永淳元年（六八二）^⑩あたりから開元年間にかけて、ようやく見え始める^⑪。これは散文においても同様である。前章で取りあげたような制度に關する上疏上表、いわば公的な文書はいくつも傳わっている。

しかし科擧に起因した私的な散文は見えない。政治の場で科擧に關する論議が提出される一方、私的な文章には科擧を題材としたものがない。この差は何を意味するのか。そもそも初唐時期の散文は、中唐以降と比べれば絶對数が少ない。しかしそれが見當たらない唯一の理由とは言えまい。詩においても題材としていないことを考えれば、初唐の頃は科擧をきっかけに文章をつづる意識はまだ乏しかったと見てよい。

この時期の散文に多い文體として「序」がある。中でも「宴序」が目立つ。これは宴會の場で参加者たちが詠んだ詩をまとめ、そこに附す形で書かれる序である。送別の宴において送別詩とあわせて作成されたものは送序とも呼ばれる。このあたりの事情については松原氏の『中國離別詩の成立』^⑫に詳しい。

科擧も別れを生む。擧人が試験の行われる地へ向け出立する。あるいは及第落第を報告するため歸省する。「宴席で詩を作る」「送別の宴を開く」「詩序を作る」といった習慣が廣まるにつれ、見送る者が詩を詠み序を作り相手への餞とすることが増える。そうなれば、その詩文の中で科擧に言及したり、相手への激勵や贊辭や慰めをつづることも當然起こってくる。ただ、初唐の頃にその動きはない。書かれ始めるのは開元あたりからである。應試及第落第により別離が生じた際の送序を以下に列擧してみよう^⑬。

陶翰（？） 開元十八年（七三〇）進士及第。開元十八年に進士科に及第した陶翰は、落第した知人が故郷へ歸るのを見送った際、送序を書いている。

「送王大拔萃不第歸睢陽序」

「送盧涓落第東還序」

「送謝氏昆季下第歸南陽序」

「送田八落第東歸序」 （以上『文苑英華』卷七二〇）

李白（七〇一～七六二）

「秋日於太原南柵餞陽曲王贊公賈少公石艾尹少公應舉赴上都序」 （『李太白集

分類補註』卷二十七）

任華（？～？） 李白、杜甫と同年代。兩者に寄せた詩がある。

「夏夜對雨餞李玘擢第還鄭州序」 （『文苑英華』卷七二二）

蕭穎士（七一七～七八〇）

「送族弟旭帖經下第東歸序」 （『唐文粹』卷九十八）

獨孤及（七二五～七七七）

「送張泳赴舉入關序」 （『毘陵集』卷第十四）

梁肅（七五三～七九三）

「送韋十六進士及第後東歸序」

「送元錫赴舉序」 （以上『文苑英華』卷七二六）

權德輿（七五九～八一八）

「送從兄南仲登科後歸汝州舊居序」

「送三從弟長孺擢第後歸徐州覲省序」 （以上『權載之文集』卷三十七）

「送劉秀才登科後侍從赴東京覲省序」 （『權載之文集』卷三十八）

「送邱穎應制舉序」

「送陳秀才應舉序」

「送鈕秀才謁信州陸員外便赴舉序」

「送獨孤孝廉應舉序」 （以上『權載之文集』卷三十九）

盛唐の陶翰や李白のものが最初期に位置し、中唐前期にかけて徐々に増加していく。そしてこれらの中に、科擧は學問の争いと述べた例が見える。天寶十二載（七五三）に書かれた獨孤及の「送張泳赴舉入關序」である。張泳が應じたのは進士科と明經科のどちらであるかはわからない。

冒頭で次のように言う。

彼馳驚乎士林者、鮮不爭九流之勝負、徇三川之聲利。

科擧に赴く者への送序であるから、「彼の士林に馳驚する者」とは應試する士大夫全般を指すと見るべきであろう。それらの者は「九流の勝負を争い三川の聲利に徇したがわざるは鮮し」という姿であった。「九流」とはあまたの學問を總稱した言葉で、『漢書』敘傳に「劉向 籍を司り、九流 以て別る」とあるのに基づく^⑭。また、「三川之聲利」とは鮑照の詩「詠史」で「三川 聲利を養う」つまり黄河、洛水、伊水のあたりでは名聲利益を求める者を養成輩出しているとうたつたのを典故とする^⑮。獨孤及は、應試する士大夫は學問で勝ち負けを争い名聲利益にすり寄る者ばかりだ、と述べているのである。特に、科擧を「學問で勝負を争う」とみなしている點が興味深い。この送序が書かれた天寶末期、岑參がすでに「科擧は戦い」との認識を詩にうたっている。別の士大夫が私的な散文において同様の意識を表明しているとなれば、この意識が士

大夫間に相當程度浸透していた證と言える。

また、「科擧は戦い」だけではなく「及第は勝利」とまで述べる例として、權德輿の文章を擧げよう。

貞元六年（七九〇）に書かれた「暮春陪諸公遊龍沙熊氏清風亭詩序」（『權載之文集』卷三十五）は、權德輿が江西觀察使李兼の幕僚として洪州にあった頃の作である。かつて戴叔倫と蕭元植とが合資して造營し現在は秀才熊氏所有の清風亭、權德輿らはその亭で宴を催した。熊氏は秀才、つまりまだ進士科及第を果たしていない身であった。よって權德輿は文中で「而して主人是に生まれ是に習い、其の修身學文、固より人より一等を加う。況んや其れ志　螢雪の下に勵し、業　薪水の餘に成せば、則ち甲科令名、指顧に在るが如し」と、熊氏がよい環境で勉學に勵みひたすら研鑽に努めているので及第は目前に迫っている、と持ちあげている。そのくだりに續けて、

是會也、有御史府楊君、薛君、環列崔君、校理魏君、皆以文發身、或再戰再克。予與皇甫君、不由是進、亦陪其歡。

と述べる。この集まりに参加していた者のうち、楊・薛・崔・魏の四人は「皆文を以て身を發し、或いは再戰し再克す」という者であつた。一方、權德輿と皇甫某は「是の進に由らざる」身ながら興趣をともした者であつた。

「御史府楊君」とは大曆六年に進士科及第を果たした楊於陵のことである^⑬。當時、侍御史、著作郎として江西觀察使李兼の幕府にあり、權德輿の同僚であつた^⑭。楊於陵がすでに及第しているとなれば、「文學で起家した、あるいは戦つて勝つた者」とは及第済みの者を指すと見て差し支えない。そして「是の進に由らざる」權德輿と皇甫

某は及第していないため前四者と分けて記したのである。事實、權德輿は生涯を通じて及第していない。

注視すべきは科擧及第を「戰」「克」と表現する點である。權德輿もまた「科擧は戰い」「及第は勝利」と認識していたことを示すためである。前述の獨孤及の例と同じく、この認識を言葉に出している點に價值がある。文事である科擧を戰いになぞらえることなど、岑參がそう表現するまでは見られなかった。ところが岑參以後は他者の詩文にも見えるようになる。時代が下がるにつれ、士大夫は「科擧及第は戰勝」という共通の認識を持つようになっていったのである。この意識が散文においても盛唐の終わりから中唐初期にかけて見え始めるといふことは、士大夫の科擧に對する意識はやはりこの時期に變化していると見てよい。そして科擧に起因して詩文を作成することは、この變化を含みつつ定着していくのである。

權德輿にはもうひとつ、見ておかねばならない資料がある。先に擧げた「送陳秀才應擧序」である。この送序は「今年秋、車を江濱に驅り、賦を京師に獻ずるに、予の柴門を叩き、惠然として別れらる」と言う點から、權德輿が江南にあつた貞元七年（七九一）の秋までに書かれたものと判斷される。陳秀才については、進士科に應試する者ということ以外は何もわからない。

權德輿は陳秀才に對して次のように言う。

文章之道取士、其來舊矣。或材不兼行、然其得之者、亦已大半。故筮仕之目、以東堂甲科爲美談。潁川陳侯、以色養力行之餘、輒工詩賦、長波清瀾、浩浩不窮。

冒頭で「文章の道もて士を取るに、其の來たるは舊し」と、昔から文章で人材登用

していた點に觸れる。續けて「或るもの 材 行いを兼ねず、然れども其の之を得る者も、亦た已に大半たり」と、文才のみで行いを兼備していないのに役人となった者が大半で、それゆえに「筮仕の目、東堂甲科^⑮を以て美談と爲す」官途の振り出しが進士科首席及第であることが褒めそやされる、と述べる。「東堂甲科」を得れば、才能と行いを兼備した優れた人物であると認められるのである。

そしてここで考えておくべきは、陳秀才の何を稱揚しているかという點である。權德輿は陳秀才が「色養力行の餘を以て、輒ち詩賦に工みたり、長波清瀾、浩浩として窮らず」儒學の教えに沿って親によく仕え行いに努める一方、詩賦作成が巧みだ、と褒めている。これから進士科に臨む陳秀才に對し、文學に關する才能の中でも特に詩賦作成を稱贊してみせたのは、そうすることに意味があるからである。つまり、進士科が作詩能力を求め、しかもその能力が及第を左右するという實態があるからこそ、進士科に應じる者への送序で詩才を褒めることが激勵として意味を持つのである。士大夫が私的な散文において、進士科及第には詩賦作成の能力が大事、という認識を見せるようになったことも、「戰勝」表現と同様に、科擧に對する意識が變化している證のひとつと言つてよい。

次章では、もう少し後の時代の、柳宗元の場合を見ていこう。

3

詩において「科擧は戰い」と詠んだのは岑參が嚆矢である。岑參の場合、實際の戰鬪に見立てて科擧を名譽獲得のための戦いととらえていた。そして岑參以降の士大夫

も科擧を戦いと表現する。前述したように、散文の場合では獨孤及や權德輿を早い例として擧げることができる。本章で取りあげる柳宗元もまた知人の應試及第落第に際して送序を多く残している。詩序五十一首の大半が送序で、しかも流謫以前に書かれたものが数多い。流謫後に送序が少ないのは、知人との直接交流が減少したためと思われる。この五十一首のうち、應試及第落第をきっかけとするものは以下の十首である。なお、科擧に起因して詠んだ詩はひとつも伝わっていない。

「送苑論登第後歸觀詩序」

「送蕭鍊登第後南歸序」

「送班孝廉擢第歸東川觀省序」(以上『柳河東集』卷二十二 序)

「送嚴公貺下第歸興元觀省詩序」

「送元秀才下第東歸序」

「送辛殆庶下第遊南鄭序」

「送崔子符罷舉詩序」

「送蔡秀才下第歸觀序」

「送韋七下第求益友序」

「送辛生下第序略」(以上『柳河東集』卷二十三 序)

貞元九年(七九三)、柳宗元は進士科に及第した。この時の狀元で友人でもあった苑論が報告のため歸省する。「送苑論登第後歸觀詩序」はその際に書かれたものであ

る。

明年春、同趨權衡之下、並就重輕之試。觀其掉鞅于術藝之場、遊刃乎文翰之林。風雨生於筆札、雲霞發於簡牘、左右園視、朋儕拱手、甚可壯也。

擧場で才能を見せつける苑論の姿を「其の鞅を術藝の場に掉^{ただ}し、刃を文翰の林に遊ばすを觀る」と描寫している。苑論は省試の場にあつてなお餘裕があり、肉を切り分ける刃を自在に操るかのよう、左右を睥睨すれば應試している者たちも拱手し、それは文章より發するかのよう、左右を睥睨すれば應試している者たちも拱手し、それは見事な様子であつた。同年の狀元たる苑論へのこれらの稱贊は、柳宗元の實感であつたろう。

ここに見える「掉鞅」とは餘裕ある態度を保ちつつ事に臨むことを言う。『左傳』に見える、許伯と樂伯と攝叔とが宣戰布告に際して交わしたやりとりによ來する^⑩。また、「遊刃」は『莊子』養生主篇に典故を持つ言葉である。ここでは文章をつづる筆を「肉を切り分ける刃」に見立てて表現している^⑪。擧場における苑論の姿を描寫するために、柳宗元は何故戰場での出來事にちなんだ表現や刃物の切れの良さを持ち出したのか。進士及第を目指す場においてそれがふさわしい表現だという意識を持つていたからではないか。そして第一章で見たように、中唐以降、進士科は詩賦作成能力を重視するようになっていたことも合わせて考える必要がある。「術藝の場」「文翰の林」とは、單なる試験會場の雅稱ではなく、應試者がそれぞれ文藝の才能を發揮する場ととらえているゆえの表現である^⑫と見ておくべきである。

貞元十二年（七九六）、柳宗元はかつて江州で知り合つた蕭鍊の登第後に「送蕭鍊

登第後南歸序」を書く。文中、蕭鍊と再會した場面を、
遇兄於澤宮之中。

とつづる。この「澤宮」とは、『周禮』に典故を持つ語で、士を選ぶ場を指す^②。つまり柳宗元は蕭鍊と都での省試にて再會したのである。再會後、蕭鍊は、
自是戰藝三北、左次陋巷。

「藝を戦わせ三たび北^にげ、陋巷に左次す」という境遇に落ちた。裏町に逼塞したのである。柳宗元は「余 亟^{しば}し其の居に會う」と、何度も蕭鍊のもとを訪れている。その後、蕭鍊は「時を逾えて名は太常に擢せら」れた。題が示すように及第を果たしたのである。となれば、「戰藝三北」とは、科擧に挑戦し三度失敗していることを指していると解釋する以外にない。また、「藝を戦わせ三たび北^にぐ」との表現は、やはり柳宗元も岑參同様に「科擧とは戦い」との認識を持っていた證と言えよう。「送苑論登第後歸觀詩序」において文事を武事で比喻したのは、やはりこの意識が影響していると見てよい。

この「戰藝」の語は、長安時代の作である「送蔡秀才下第歸觀序」にも見える。

今蔡君馳聲耀譽、聞於公卿、戰藝之徒、推爲先登。

蔡秀才^は高官に聞こえるほど名をあげており、「戰藝の徒」は先に登る者とみなしていた。登る先は無論「第」である。柳宗元は、科擧とは「藝でもつてする戦い」との認識を持っていたと考えられる。

貞元十三年に書かれた「送辛殆庶下第遊南鄭序」では及第を「克」と表現している。

朝廷用文字求士。毎歲、布衣束帶、偕計吏而造有司者、僅半孔徒之數。春官上大夫、擢甲乙而升司徒者、於孔氏高第、亦再倍焉。僕在京師、凡九年于今、其間得意者二百有六十人。其果以文克者、十不能一二。嘗從俊造之後、頗涉藝文之事、四貢鄉里而後獲焉。

朝廷は文事で士大夫を採用する。そのため中央へ上ってくる者は毎年一千五百に達し、そのうち禮部の試験をくぐり抜けるのは約百四十名であった。そして柳宗元が都にあつた九年間の「意を得た者」は二百六十名。「文を以て克ちし者」は應試した者の十分の一程度でしかなかった。『登科記考』に據れば、貞元四年から十三年までの進士及第者は合計二百五十五名である。そして柳宗元自身、及第を目指して「藝文」を涉獵し、郷貢として四度挑みようやく「文を以て克」つ、つまり及第を得たのである。及第を勝利とするのは岑參以來の表現であり、柳宗元も同様の認識を持っていたことがうかがえる。

そしてこの送序の中では辛殆庶の姿を、

戰術藝之場、莫與爭鋒。

と描寫している。「術藝の場に戦うに」科擧の試験場において「與に鋒を爭う莫し」辛殆庶にかなう者はいなかった。「鋒を爭う」とは無論本來は武器での戦いを意味する。ここでは文事を武事になぞらえ、科擧が戦いであることを強調しているのである。最初に取りあげた「送苑論登第後歸觀詩序」において、戦場での逸話を典故とした「掉鞅」、筆を刃物に見立てた「遊刃」といった言葉を用いるのと同じ表現である。試験會場を「術藝の場」と表現する理由も、前述したとおりである。

さらに、柳宗元が長安在住時に韋中立へ贈った「送韋七下第求益友序」を見てみよう。この送序では「不勝」の語を三度繰り返している。柳宗元はまず進士科に應じる者が、

咸多爲文辭、道今語古、角夸麗、務富厚。

「咸な多く文辭を爲し、今を道い古えを語り、夸麗を角い、富厚に務む」みな詩文を多作し、その中で古今の諸事に觸れ、華麗さを争い充實した内容であろうとする、と描寫する。次いで、試験官はそういう舉人の答案を十分の一も讀むことはできず疲れ果てると説く。そこで柳宗元は韋中立に助言する。

唯聲先焉者、讀至其文辭、心目必專、以故少不勝。

「唯だ聲の先んずる者のみ、讀みて其の文辭に至り、心目必ず専らにす、故を以て勝たざること少なし」つまり應試する時點ですでに有名であれば、試験官はしつかり讀む、そうなれば相手の胸中腦裏を獨占できるので「不勝」となることは少ない、との見解である。このような助言を呈するのは、韋中立は文章も行いも立派であつたものの、

然而進三年連不勝。

三年連續して「不勝」という状況にあつたためである。それゆえに、

或以韋生之不勝、爲有司罪。

韋中立の「不勝」を試験官の罪だと考える者さえいた。送序の題が示すように、これらの「不勝」はすべて科擧に失敗したことを指している。そして、柳宗元がそう表現するのは、科擧及第は勝利という認識が源となっていることはもはや言うまでもない。

また、先に名を知らしめ「文辭」を主司に讀ませることが大事であると説く。文才の必要性に言及するのは、無論、進士科が詩賦作成能力を重視することを意識した上でのことである。

これら、柳宗元が言及する科擧及第を戦勝ととらえていた意識、そのために文藝面での才能が必要という意識は、當時の士大夫が多かれ少なかれ有していたものと考えてよいであろう。何故なら、それらは柳宗元の散文において突如として表面化したものではないからである。盛唐の入り口あたりから科擧に起因した詩文が徐々に作られ始める。その数が次第に増加する。その中で、岑參が科擧及第を戦勝と言う。前章で述べたように、例えば獨孤及や權德輿もその認識を示している。柳宗元に到っては、科擧は文藝でもって戦い勝つものとまで言っている。しかもその認識を制度に對する意見の中で表明しているのではなく、私的な散文において述べている點に價值がある。中唐の士大夫にとってそれらが特殊なとらえ方ではなく、ごく普遍的なものになっていたことを意味するからである。

おわりに

唐代を通じて科擧は行われていた。この科擧について、士大夫は盛唐に入った頃から詩の題材とし始め、私的な散文でも觸れるようになる。特に應試及第落第によって生じる別離は、送別詩や送序で科擧に言及するきっかけともなった。その中で科擧及第を戦勝と表現するようになる。そして文藝でもって戦勝する、とまで述べる。これらの現象は、何故初唐の頃には見られなかったものであろうか。何故盛唐以降に増えた

のであろうか。理由のひとつには、進士科における雑文試の導入とその詩賦試化が擧げられよう。士大夫による科擧關連の詩文が出てくるのは導入後であり、その數は詩賦試化と歩調を合わせて増加していくからである。士大夫の科擧に對する意識に轉換をもたらしたことは間違いない。

また、盛唐中盤以降、士大夫は科擧を戰とみなす意識を表に出すようになる。これは、科擧を實際の戰の代替物と認識していたゆえと見てよいであろう。唐初、例えば魏徵が「述懷」で「筆を投じ戎軒を事とす」とうたったように、戰に従事し功績を立て國に貢獻することは士大夫の爲すべきことであつた。しかし、平和な世の中ではその機會もない。功績を立てるのは戰場ではない別の場である。士大夫はその場を科擧に求めた。そういう状況を背景に持ちつつ、盛唐後半、岑參が戰場での功績獲得と科擧及第を同一視して詩にうたう。中唐以降の士大夫も科擧及第は戰勝と述べる。となればこの「戰勝」という表現は、單に士大夫同士が及第を爭うゆえの表現と見るわけにはいかなくなる。士大夫が戰場で功績を立てる機會の代わりを科擧に求め續けた、そういう意識の表われとして受け取る必要が出てくる。現在のところ、筆者はそう考えている。

以上、前論および本論において、士大夫の科擧に對する意識の變化については指摘できた。ただし、検討すべき事柄はなお残っている。明經科と進士科とに對する認識の變遷や、常科と制科とをどう見ていたのかについても確認が必要であろう。これらの課題は、唐代士大夫の科擧に對する價值觀形成を論じる一環として、いずれ考察を試みたい。

〈注釋〉

- ① 「唐代士大夫の科擧に對する意識の變化」、『岑參の場合』、『吉田富夫先生退休記念中國學論集』 汲古書院 二〇〇八 一四九～一六一頁
- ② 貞觀八年、詔加進士試讀經史一部。（『通典』卷十五・選舉三）
- ③ 例えば傅璇琮氏はこの上疏を肅宗期の上元と判斷している。しかし『通典』は時系列に沿って項目を並べており、著者杜佑が肅宗の上元元年（七六〇）時點ですでに二十八歳であることを考えれば、自身が存命中に提出された同時代人の上疏を高宗期へ誤入することは考えにくい。
- ④ 至調露二年、考功員外郎劉思立始奏二科並加帖經。其後又加老子孝經、使兼通之。永隆二年、詔明經帖十得六、進士試文兩篇、識文律者、然後試策。（『通典』卷十五・貢舉三）
- ⑤ 『登科記考』卷三・光宅二年の項に據る。『全唐文』卷三四一の「朝議大夫守華州刺史上柱國贈秘書監顏君神道碑銘」には、顏元孫が進士に擧げられた際の出題が「省試九河銘、高松賦」とあり、知貢舉は「考功郎劉奇」であつたと傳える。しかし劉奇という人物が知貢舉であつたことはなく、『登科記考』は光宅二年の知貢舉を劉廷奇としている。この判斷は、劉廷奇が光宅元年に十六人に對し重試を行ったと『唐摭言』卷一にあることに基づくようである。

- ⑥ 『唐代科擧與文學』 傅璇琮 陝西人民出版社 一九八六
『登科記考補正』 孟二冬 北京燕山出版社 二〇〇三

《唐代科舉詩賦用韻研究》王兆鵬 齊魯書社 二〇〇四

『登科記考』、《唐代科舉與文學》P一七八以下とP四〇七、《登科記考補正》、《唐代科舉詩賦用韻研究》を適宜参照。各年の詩賦の考證については《登科記考補正》が最も詳細。王氏の著作は《登科記考補正》に基づいている。唐代を通じて、科舉における詩賦の題のみならずそれぞれの用韻も考察しており、簡便である。

⑦ 又、舊例、試雜文者、一詩一賦、或兼試頌論。（『封氏聞見記』卷三・貢舉） 作者の封演は代宗から德宗期にかけての人物。

⑧ 進士文名高而帖落者、時或試詩放過、謂之贖帖。（『封氏聞見記』卷三・貢舉）

⑨ 進士改帖大經、加論語。自是舉司帖經、多有聲牙孤絕倒拔築注之目。文士多於經不精、至有白首舉場者。故進士以帖經爲大厄。（『封氏聞見記』卷三・貢舉）

⑩ 徐文茂《陳子昂論考》（上海古籍出版社 二〇〇二）の年譜に據る。

⑪ 鄭曉霞《唐代科舉詩研究》の卷末に附された《全唐詩》科舉詩索引には初唐の詩も見える。索引自體は有用な面もある。しかし、科舉との関連付けが強引な例も含まれており、検討を要する。

⑫ 『中國離別詩の成立』 松原朗 研文出版 二〇〇三

⑬ 應試及第落第に關連すると思われるものの、内容からそうだと推察できる類の資料については除外した。それらを含めずとも題から判斷できる資料のみで論證可能と判斷したためである。例えば、陶翰の「送崔二十一之上都序」（『文苑英華』卷七二〇）は應試によって、任華の「送李審秀才歸湖南序」（『文苑英華』卷七二二）は落第によって別れが生じたと思われる。

- ⑭ 劉向司籍、九流以別。（『漢書』卷百下・敘傳）應劭の注に、「儒、道、陰陽、法、名、墨、從橫、雜、農、凡九家」とある。
- ⑮ 五都矜財雄、三川養聲利。（『文選』卷二十一・鮑照・詠史）。五都とは漢代の洛陽、邯鄲、臨淄、宛、成都。三川とは河、洛水、伊水。
- ⑯ 『登科記考』卷十。
- ⑰ 鄂岳觀察使奏爲判官、轉左驍衛兵曹、累改評事監察御史、歷殿中得緋衣銀魚、使遷江西、公隨之、加侍御史著作郎。（『李文公集』卷十四・唐故金紫光祿大夫尚書右僕射致仕上國柱弘農郡開國公食邑二千戶贈司空楊公墓誌）
- ここでの鄂岳觀察使は李兼。李兼は鄂岳團練使から江西觀察使へ移っている。また、《唐方鎮文職僚佐考》（戴偉華 廣西師範大學出版社 二〇〇七）の「江西 李兼」の項では、「校理魏君」は建中元年進士及第の魏弘簡、「環列崔君」は崔從質、「皇甫君」は皇甫湜とする。
- ⑱ 舉賢良、與夏侯湛等十七人策爲下第、拜中郎。武帝詔曰、省諸賢良答策、雖所言殊塗、皆明於王義、有益政道。欲詳覽其對、究觀賢士大夫用心。因詔諸賢良方正直言、會東堂策問。（『晉書』卷五十一・摯虞傳）
- ⑲ 樂伯曰、吾聞致師者、左射以戟、代御執轡、御下、兩馬、掉鞅而還。
- ⑳ 彼節者有閒、而刀刃者無厚、以無厚入有閒、恢恢乎其於遊刃必有餘地矣。
- ㉑ 澤共射樞質之弓矢。鄭司農云、澤、澤宮也。所以習射選士之處也。射義曰、天子將祭、必先習射於澤。澤者所以擇士也。（『周禮』夏官・司弓矢）